

# 都市部における男性の地域活動参加と男性性

—— 子どもとかかわる地域活動に参加する男性を事例に ——

浅 香 宏 紀\*・中 澤 智 恵\*\*

生活科学分野

(2014年9月30日受理)

## 1. はじめに

男女共同参画社会の実現に向けて、女性の社会進出や男性の子育て支援など様々な場面で性別によらない生き方の見直しがなされている。そのなかで長時間労働によって地域生活から疎外されがちな男性が、いかに地域とつながりを持ち、地域社会の担い手になっていくかということは喫緊の課題である。実際に地域活動をする男性はどのように考えているのだろうか。

地域活動では、世代や性別の異なる様々な他者と共同的にかかわることがしばしばある。その場面は競争心があることや自己主張的などといった男性性の規範とは相いれない関係性により成り立っている側面がある。そのような地域活動を行うとき、男性自身は違和感や葛藤を経験するのだろうか。

本研究の目的は男性の地域活動参加において、ジェンダーがどのように関係しているのかを明らかにすることである。女性に比べて男性の参加が少ない領域である、子どもを対象とした地域活動をしている男性を対象にインタビューを行い、実際に男性にとって困難があるのか、また活動していく中で他者とのかわり方や活動に対する意識に変化があるのかなどを検討する。そして地域活動を通して、それまで形成してきた男性のジェンダーの殻を破り、男性自身の新たな学びや人間関係を形成するにはどのような点が重要であるかを考察したい。

本稿の構成は、まずジェンダーの視点から男性の地域活動参加の実態を諸統計データによって把握する。次に男性性・男らしさについての先行研究を整理する。

そうした文献検討のうえで、地域活動をしている男性に行ったインタビュー調査をもとに、男性の地域活動参加における男性自身の葛藤や変化について分析・考察を行う。

## 2. 男性の地域活動の実態

### 2. 1 地域活動の男女差の現状

今日の地域活動は、ボランティアやNPOなど地縁のみによらず個人の関心によって集まり、様々な活動が展開されている。一方で地域にはいまだに性別による役割分担意識が根付いており、男女によって活動する領域や立場、役割など異なっていると指摘される。

ボランティア活動に参加している男女の割合について、社会生活基本調査(総務省, 2011)によるとボランティア活動の行動者数は男性が1361万1千人、女性が1634万1千人となっている。行動者率は男性が24.5%、女性が27.9%で、男性よりも女性のほうが3.4ポイント高くなっている。年齢階級別にみると、65歳以上は女性より男性のほうが高くなるものの、65歳未満のすべての年代は女性の方が高い。

活動分野について、男性は「まちづくりのための活動」が11.5%と最も高く、次いで、「子どもを対象にした活動」が5.5%などとなっている。女性では、「子どもを対象にした活動」が10.6%と最も高く、次いで「まちづくりのための活動」が10.4%となっている。女性よりも男性が多い活動として、「スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動」(女性2.7%, 男性4.4%)などが挙げられる一方、「高齢者を対象にした

\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

\*\* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

活動」や「障がい者を対象とした活動」の男性参加は低い。もっとも男女差があった活動は「子どもを対象とした活動」である(女性10.4%, 男性5.5%)。

具体的な活動内容に関して、社会福祉協議会(2010)の調査によると、男性では「団体・グループの運営、イベントや事業等の企画」が、女性では「話し相手になる、一緒に遊ぶ、劇を見せる等の交流・遊び等」の活動がそれぞれ4割台で最も多い。また組織の代表について、ボランティアの団体・グループの代表者の66.1%が女性であった。一方、内閣府(2012)の調査によると、自治会長やPTA会長における女性の割合は、自治会長が4.4%、PTA会長が11.2%と極端に少ない。こうしたことから比較的公的な色合いが強い地域での意思決定過程においては、男性の参加が圧倒的多数であることがわかる。

このように地域活動にかかわる男女の実態を見ると、男女によって違いがあることがわかる。ボランティア活動を行う者について、実数、行動者率ともに男性の方が低い。また活動分野や内容においては男女で偏りがみられ、地域でのケア的な活動は女性が多く、意思決定の場面では男性の参加が多いということがみられる。

## 2. 2 男性にとっての地域活動参加

男性は地域と疎遠であるということがしばしば言われている。そのように言われるのはいつからだろうか。伊藤(2008)によると、それは1970年代中期以降、サラリーマン家庭が増えていき職住分離と長時間労働が進むなかでみられるようになった現象であり、それまでは男性も地域や家庭を中心に生活していたという。「男は仕事、女は家事育児」といった性別役割分業が定着し、長時間労働が進むなかで、男性は地域や家庭での時間が減少し、家庭や地域は基本的に女性が担うことが多くなっていった。

次に男性と地域活動についての関係を主題とした研究について、飯島と田中の研究を取り上げたい。

飯島(2013)の「男性の地域参加の現状と課題」についての研究では、男性にとっての地域活動の有益性を、男女共同参画社会の実現という側面と、男性個人の側面の両側面から説明している。社会にとって、ワーク・ライフ・バランスの観点から男性の地域活動参加は、女性の経済社会への参画を支え、「新しい公共」を創造し、地域の活性化につながる。また男性個人にとっての地域活動は、地域での仲間関係が築かれ、地域の居場所ができることで男性自身に精神的な充足感を生むという。

さらに飯島は、実際に男性の地域活動参加を推進するうえでの問題点として、意思決定権を握り、固定的性別役割分担に肯定的な「権威・支配者としての男性」によってさらに意思決定の地位を男性が占める可能性を指摘する。そのため男性の地域参加には段階的な支援と支援者による男女共同参画に向けた意識的な支援が必要だということを述べている。

田中(2009)は「定年退職した男性の地域活動に関する聞き取り調査」をもとに、強制力がなく、自由の幅が大きい「柔軟な組織運営」と「緩やかな連帯」を基盤とする地域でのグループは、多様な価値観を受け入れる余地をもっており、地域での男性の居場所となりうると指摘する。そうして地域活動を通して形成された新しい人間関係は、定年退職後の男性にとって、居場所・心の拠り所になっている。さらに田中は性別役割分業を当たり前として生きてきた世代は、地域活動において男性だけの閉じられた集団形成をしてしまうことがあることを指摘する。そのうえで、定年退職した男性の地域活動が、社会全体への貢献を目指して、今後女性や若い世代を巻き込んだ運動へと発展していくことが重要であるという。

飯島と田中が男性の地域活動において危惧する点として、意思決定の地位を男性が支配することになりがちな点や同世代の男性による排他的な集団になりがちな点が挙げられる。これらは男性性の特性と関係しているのではないだろうか。次に男性性とは何かを先行研究をもとに検討する。

## 3. 個人レベルと集団レベルの男性性

### 3. 1 男性性・男らしさ

男性性とは「文化的・社会的に男性に望ましいと期待される特性に関するジェンダー・ステレオタイプ」である(鈴木, 2006)。私たちはジェンダーによって男女で異なる社会的期待を経験している。男性規範のステレオタイプについての具体例として、強くたくましいことや感情を抑制し冷静でいること、闘争心があること、権力への欲求、勝ち負けへのこだわりなどが挙げられる。「男らしさ」もほぼ同様の概念である。

伊藤(1996)は「男らしさ」を優越志向、所有志向、権力志向の3点にあると指摘している。優越志向とは、競争において勝利したい、他者に優越したいという心理的傾向である。所有志向とは、できるだけたくさんモノを所有したい、しかもそれを自分のコントロールの下に置きたいという心理的傾向である。権力志向とは、自分の意志を他者に押し付けたい

という心理的傾向であると述べている。

ただ男性性は時代や地域によって変化していくものであり、時には強さが強調されたり、またある時には優しさが「男らしさ」とされたりと、しばしば矛盾をはらむものでもある。

### 3. 2 男性と親密性

自己開示の発達的变化に関する榎本（1997）の研究では、男性は自己開示をしにくい一方、女性は自己開示が容易であるという。こうしたジェンダー差の背景には、「弱みを見せることになる」「拒否される恐れがある」「不快になる」などを想定する、親密さに対して否定的な男性の性別役割規範の影響がある（伊藤、2000）。

男性の親密な関係について、中村（2003）はホモ・フォビアという心性から説明する。中村によると、男性同士の親密な関係は、同性愛が想起され、嫌悪されるため男性同士の親密な関係の形成には、近づきたいが嫌われるかもしれないという葛藤を伴うという。しかし男性同士の仲間関係や手段が存在しないわけではない。スポーツや職場、祭りなどではしばしば男性同士の集団が見られる。こうした場面に見られる男性同士の関係は「ホモ・セクシュアルとは異なる儀礼的な同盟関係」であると中村は指摘する。この関係は女性同士に見られる親密な関係と異なり、目的達成のために協力関係を結ぶような表面的で道具的な関係である。

### 3. 3 女性排除の集団形成

男性同士の親密な関係を築くことが男性にとって葛藤を伴うという問題がある一方で、男性同士で構成される集団には、女性を排斥し、男性にしかわからないという閉鎖的な空間をつくることや集団内に主従関係が存在し、下の者には絶対服従が強えられることもある。日本の企業組織について多賀（2006）は男性支配体制があり、それを維持するために女性排除の文化があるという。組織の人間として、男性は女性よりも権威や地位において優れていることが男性のアイデンティティにとって重要であり、女性に従うような関係にあることは、男性自身に葛藤をもたらす。こうしたことから企業組織は情緒的な「男同士の絆」によってつくられた「ホモ・ソーシャル」な組織が形成されると指摘する。

男性のつくる集団特性として、ある時は目的達成のための道具的な関係を築き、またある時は男性としてのアイデンティティを保持するために女性に排他的な

男性同士による「ホモ・ソーシャル」な集団を形成するということである。

以上、男性性・「男らしさ」から、男性は組織において地位や権威に優位な立場を望み、男性同士による縦関係の組織構成がみられることは、前節でみた地域活動における男性参加の問題点である、意思決定の場面を男性が多く占める点と男性同士の閉じられた集団を形成する点と密接に関係しているといえる。

次節では、実際に地域活動を行う男性へのインタビュー調査に基づいて、地域活動参加と男性性との関係について、検討していく。

なお本稿で「男性的」と形容する場合はジェンダー秩序に基づく社会において、男性に求められる男性性や期待される「男らしさ」を内面にジェンダー形成した男性の行動様式を指すものとし、生得的な差異として論じるものではない。

## 4. 子どもとかかわる地域活動に参加する男性へのインタビュー調査と参与観察

### 1) 調査方法

子どもとかかわる地域活動に参加する男性へのインタビューおよび参与観察を実施した。インタビューは40～50代男性を除き、一人2時間程度聞き取った。40～50代男性は個別に時間を取るのには難しいということなので、活動日の日に筆者も活動に参加し、活動終了後の時間にまとめて聞き取る形式をとった。参与観察は「フリースペース・N」で実施した。筆者は2013年の2月から12月の間、活動および話し合いの場に参加し、男性の発言やふるまいなどを記録した。

### 2) 調査時期

2013年7月中旬から12月上旬に実施した。

### 3) 調査対象

子どもとかかわる地域活動に参加している男性を対象とする。子どもとかかわる地域活動に限定したのは、女性の参加に比べ男性の参加が少ないこと、男性は女性に比べ子どもと接する機会があまりないと思われること、そして子どもを対象とした地域活動は、ほかの活動分野に比べて男性が（職場などで）慣れ親しんだ男性的な集団ではない可能性が高く、そこでどのような男性性の葛藤と変容があるかを検討するためである。

活動内容はどの活動も、子どもと共同的で親密なかわりを要する活動である。対象となる男性の世代に

ついて、男性の地域活動参加における先行研究での対象男性は、しばしば高齢期男性や子育て世代の男性であり、青年期男性を視野に入れた研究がほとんどないこと、昨今の性別役割分業意識の変化に沿って、青年から中高年と男性性規範に対する態度も異なると思われることから、地域活動に参加している幅広い世代の男性を対象とした。大きく分けて独身ないしは結婚しているが子どものいない若年層、子育て期の中年男性、退職後の高齢期男性である。具体的には以下の3団体に所属する男性を本研究の対象とした。

なお活動組織や活動内容に関する詳しい内容は注にまとめたので、そちらを参照されたい。(注)

表1 地域活動団体と対象者の属性

地域活動団体・活動概要	対象者 (年齢/活動歴)
①T市N学習館 「フリースペース・N」 T市の社会教育施設であるN学習館で行われている子どもの居場所事業である。地域住民を委員とするN学習館運営協議会の有志を中心に実施されている。調査時で4年目の活動である。	Aさん…60代 2年目 Bさん…70代 4年目 Cさん…70代 4年目
②K市青少年リーダー養成講座 地域の青少年リーダーを育成するために、K市教育委員会が主催で行っている事業である。講師は地域の青年や大人であり、その内容は子ども会活動のような形の体験活動が主である。活動年数は10年以上である。	Dさん…40代 2年目 Eさん…40代 4年目 Fさん…50代 10年目 Gさん…50代 4年目 Hさん…20代 5年目 Iさん…20代 3年目 Jさん…20代 1年目 Kさん…10代 1年目
③S地域おやこ劇場 地域でより良い子育て環境を作ることを目的に、いくつかのブロックに分かれて子どものための自主活動を行っている、地域住民による団体である。活動創立から30年以上になる。	Lさん…20代 2年目

#### 4) 調査内容

- ①活動をはじめたきっかけ
- ②活動していてよかったこと、困ったこと、活動のしづらさについて
- ③活動を続けていく中での男性自身の変化
- ④今後の活動に対する期待や要望

⑤自らを男らしいと思うか(「男らしさ」についてのこだわり)

## 5. 調査結果

インタビュー調査の結果から、活動における男性の戸惑いや変化が明らかになった。本節では男性の語りを引用しながら、その内容を見てゆくことにする。

### 5. 1 活動参加における男性の困難と克服

#### ①子どもとの親密なかかわりに慣れない男性

養成講座にかかわるDさん(40代)は青少年委員の先輩に誘われたことが参加のきっかけであるが、はじめは断っていたという。「なかなか地域の子どもとかかわるということをやったことないし、やっても力になれないから」というように、子どもとかかわる活動に不安を感じていたことがうかがえる。Dさんはこれまで小学校のサッカーチームの会長などをしてきたが、「裏方の面が多かったので、直接的に子どもたちと一緒にやるっていうことはない」ということから、子どもと親密なかかわりを要する養成講座は、今までと求められる役割が異なり、やや戸惑いを感じていたようにもみえる。それでも活動を続けているのは、お世話になっている先輩への「恩返し」と「使命感」であるという。そうした中で活動2年目となり、Dさんは次のようにふりかえる。

「反省会の中で、自分の中で何がこうなのという一方で、みなさんそういう観点で見てるんだと、それを聞くだけで変わってくる。何をチェックしなくちゃいけないなど。こういう講座の中で自分の中で勉強させてもらってるなど。逆にそういう風に思っ話していかなきゃと自分の中で変化している。」

子どもへの接し方について、活動時にはほかのメンバーのふるまいを見たり反省会の中で自分とは違う視点があることを聴いたりして、どのように子どもにかかわればよいかを学び、自身の活動に活かしていることが活動を続けられる要因であると考えられる。

#### ②男性が少ないことでの戸惑い

同じく養成講座に参加する20代男性の3人は、それぞれ同期の男性がいない。そのため同世代男性が少なく同期は全員女性のため、女性陣の輪に入れずに悩んだり、あまり活動に積極的になれなかったりした時期がそれぞれあった。

Iさん(20代)は当時のことを次のように語る。

「うちの同年代が、男子がいないんですよ。そういうので付き合いづらくて。友だちみたいに遊んだりできなくて、話しづらかったのが最初にありましたね。誘いづらいというか、距離ができちゃって。」

それでも活動を続けていくことができたのは「先輩たちが楽しいから」というように、男性・女性の先輩に声をかけてもらい、支えられて活動にやりがいや楽しさを感じられるようになったのだろう。今では女性たちとも仲良くやれているという。養成講座の組織において男性の参加が比較的少ないことが、かえって必然的に上下の男性同士のフラットなつながりと、女性との積極的な交流にもつながっているようだ。

### ③性別役割分担意識による葛藤の回避

フリースペースにかかわる高齢者男性は活動のしづらさを感じるということはないと言っていた。しかし参与観察の中で、しばしば女性のスタッフが子どもに手料理をふるまったり、世間話をしている間、男性一人手持ち無沙汰にしている場面がしばしばあった。また活動の頻度も女性が多く、男性は周助的・補助的な参加にとどまっている。フリースペース事業が発足するまでの準備段階では非常に精力的に活動していたが、実際に活動の担い手となると積極的になれずにいる様子が見えてくる。

Bさん(70代)は、フリースペースについての話し合いの中で「“男性スタッフがいてもしょうがない”なんていう子どもの声もある」と発言しており、女性に比べて子どもに必要とされる実感が持てず、子どもとのかかわりや自身の役割について、やや戸惑いが生じていることがうかがえる。それでも女性のように料理をふるまえるようになりたいとか、ならなければといった気負いはないようだ。むしろ女性が自主的に調理などをして子どもを喜ばせ、子どもとの交流のきっかけを作ってくれることに感謝を示している。そのため主導権を女性が握ることに関しての葛藤は感じていないようである。

一方Aさん(60代)は活動時、女性メンバーがいるときは「心配ない」が、男性メンバーだけの時はなにができるか考えることはあっても、「まあいっかどずるずる来ている」ので何かをしなくちゃいけないという義務感にさいなまれることもないようだ。Aさんは次のように言う。

「真剣な気負いになってないから真剣に考えてないんだよ。もしかして女性メンバーがいなかったら、真剣に考えるのかもしれないね。なんとなく主になって動いてないということだな。」

Aさんにとって、子どもを喜ばせようと特別何かをするわけでもなく、ありのままできりあえず参加できるという、フリースペースの持つ「ゆるやかさ」が活動を続けられる理由なのかもしれない。

またCさん(70代)も女性や子どもとともに活動することに葛藤を抱くことはないが、次のように語る。

「でもやっぱり女性じゃなきゃできないことは女性にお願いして。例えば食べることとか遊ぶこととか旅行とかは幹事をお願いして、それぞれ役割分担すると。やっぱり男性もそうだけど役割分担することが非常に大事なことで、その人の持っている必ず1つや2つのスキルを持ってますから。その得意技をうまく引き出して役割分担をして。役割分担をするとみんなやりますからね。そういう引き出しが大事だと思いますね。」

女性陣のように子どもたちに手料理をふるまったりしなくてはならないというような気負いが生じてしまったら、活動参加にも支障をきたすことも考えられる。女性のように料理をふるまうことはできなくても、その場にいるというだけで役割を果たしていると割り切っているために男性性規範の揺らぎを強く経験することがないのかもしれない。その一方で男性自身にとって、その場が女性に比べ楽しみや自己実現などの場となりやすく、活動に主体的になれずにいると考えられる。

それでも活動を続けられるのは、フリースペースの組織面において、担い手の多くが準備段階から運営協議会でのつながりがあり、仲間意識によって支えられているため、無理することもせず、また強いられることもなく気負わずに参加できていることが関係しているのではないだろうか。

## 5. 2 活動参加による男性自身の変化

子どもとかわる地域活動に参加する男性では、活動を通して自己の価値観を問い直し、意識の変化につながるということがわかった。

### ①青年男性における人とのかかわり方の変化

青年男性からは子どもやほかのメンバーとの交流を

通じて、人とのかかわり方への変化が語られた。

おやお劇場にかかわるLさん(20代)は次のように語る。

「あんまり実感としてはないけど、誘ってくれた同級生もそうだし、劇場と全然関係ない友達とかから、丸くなったねと言われるようになった。そもそも入った時から、ちょっと言葉はとげとげしいという自覚はあったんだけど、いろんな人と話していると、相手に対して話し方変えていたりとか、言葉選んだりとかそういうのを見てて、参考になるなど。俺も自分で悪い部分とわかってたから、言葉厳しいとか。ちょっとこういうの見習ってみようかなって。特に子どもを相手にしていると、子どもに対して強くいっても(うまく伝わらない)。(中略)変わったんだと思えたのはよかった。自分も成長したんだなと実感した。」

また養成講座にかかわるHさん(20代)は、準指導者になった当初、「あまり自分から話しかけたりしなかった」という。しかし活動をしていく中で、「準指導者なのにあの人何やってるんだとか、そうは思われない」という思いから、「積極的に自分から行動しなくちゃいけない」と考えるようになった。そうして能動的に人にかかわっていきながら活動していくなかで、自身の変化を次のように言う。

「自分が心を開いたら相手も開いてくれるっていうのがわかったから、そこで別にそんなかっこつけてなくても、先輩だろうと悩んでいるときに頼ったら真剣に答えてくれるし。こっちがそうやっていけば向こうも真剣に相談してくるし。ていうのをわかったから弱みをみせてもいいというふうになったんですかね。」

「言葉使いが丸くなった」や「弱みをみせてもいい」などの言葉から、弱みをみせたりしない、「女々しく」しないなどの従来の男性性規範とは異なる方向に本人の意識が変化していることがわかる。本人たちの語りから、さまざまな考えや個性を持ち、世代や性別の異なる人と交流し、多様な価値観にふれることで視野の広がりや他者への接し方にも変化が生じていることがうかがえる。また、ともに活動している男性同士、同じ活動に参加していることから考えや置かれた立場など似ている共通点があるかもしれない。そのためお互い理解しあえることが多く、自己開示しやすい人間関

係が築かれやすいとも考えられる。そのような仲間関係を維持し、発展させていくためにも、自己の考え方や他者とのかかわり方を見つめ直し、自ら変わらなくてはならないという思いに至り、意識や態度の変革が促されているのではないだろうか。

## ②中年男性における生活態度の変化

中年男性では、活動を通じて自身の生活態度の変化が生じていた。都心に勤務する会社員のEさん(40代)は、夜遅くに帰宅することもあり、平日の夜にある定例会に参加することが大変だという。忙しい中での活動参加を通して自らの生活をふり返り、自身の変化を次のように語る。

「仕事のメリハリの付け方とか時間の使い方とか、今までなんとなくやらだらとやってきたところをすごく考えて、けじめをつけて、ちゃんとそこに行けるように。自己時間管理というのがより一層できるようになったな。制約ができたことによって。忙しいからできないではなくて、それをカレンダーに組み込むことによって、なんとかしなくちゃいけないとしてくると根本的な意識が変わってくるというのはありますよ。」

日々の生活において、仕事が大部分を占める中での地域活動参加は、物理的制約が強く、自身の生活態度を再考する機会となっているようだ。また活動してよかったことについて「地域とのつながり、地域をしょって立ってくれる子どもたちから声をかけてくれたりとか、僕にとっては一番やってよかったな」という。仕事や家庭のほかに、地域での活動や人付き合いがEさん自身の楽しみでやりがいのあるものとなっている。

## 6. 考察

これらの聞き取りの結果から、ジェンダーのジレンマが生じやすいと思われる女性や子どもなどとの共同的地域活動をしている男性でも、女性や子どもとともに活動していくことに対する違和感や、男性自身の役割葛藤を強く抱き続けていることはあまりみられなかった。それには男性の意識や態度の変容と、性別役割分担意識による葛藤回避、活動を通じた多様な他者とのつながり、フラットな活動組織の構造という4点が関係していると考えられる。

第1に、男性の意識や態度の変容である。そもそも

こうした活動に参加している男性は概して「男らしさ」のこだわりがなくジェンダー・フリーな男性のみが参加しているということだけによるのではない。物事をはっきり言う男性や弱みを見せるようなことに抵抗があった男性など、従来の男性性規範を内面化している男性も活動している。そうした男性が活動に継続的に参加しているのは、活動の過程で男性自身の意識や態度の変容がある一定生じているためであろう。子どもやほかのメンバーと接することで、その対象がいわゆる「自己を映す鏡」となり、自己変革へとつながっている。またともに活動する仲間の行動を見たり、ともに協力し合ったりするなかで、人への接し方やふるまいを新たに学び、自分自身の行動を見つめ直すことになっている。

第2に、大きな変容がみられず、むしろ葛藤を回避しているように受け取られる参加のあり方である。これは、フリースペースの高齢者男性が女性のように料理をつくることができなくても男性は男性でできることをすればいいという、性別役割分担意識を保持したままのケースである。これによって男性性規範が揺るがされるような葛藤を抱くことがなく活動に参加することができている。

第3に、男性自身に変化を促したり、ありのままでも参加できる要因として、活動を通じた多様な他者とのつながりが関係している。活動参加が使命感や社会貢献意識等に支えられているだけではなく、この場を通じた人とのつながりが自分自身の楽しみややりがいとなっている。このことによって活動に携わっていたという思いが生じ、男性の変化につながっている。活動に参加し続けていくためには、求められる役割を果たす必要がある。その役割をよりよく遂行していくためにはどうしたらよいかと自己をふりかえることを通して、人とのかかわりや男性自身の役割意識の変化が生じているのではないだろうか。一方でそうした活動を通じた多様な他者とのつながりは、活動の場だけではなく、インフォーマルなどでの活動者同士のつながりや楽しみが築かれることによって、さらにこの活動に携わっていたという思いに駆られ、結果的に男性自身の意識や態度の変革につながると考える。

第4に、そうした男性の変容や多様な他者とのつながりを支え促進するには、フラットな活動組織の構造が関係している。今回取り上げた組織ではそもそも活動におけるリーダーという明確で固定的な役割を担う存在はいなかった。また性別によって役割が意図的に分けられているということもなかった。活動参加に拘束力もなく、自主的に男女それぞれ話し合いながら

計画され、共同的に展開されている。こうしたことからむしろ男性がリーダーを背負わされるようなこともないため、活動におけるプレッシャーや負担を背負うこともなく参加できており、「男らしい」部分を期待されることもなく気負わずに参加できている面があるように推察される。また活動内容やグループを活動者自身のみで一から作っているものではなく、方向性は行政から出されていたり、行政と共に協働していたりということもあるため、それほど旗振りの強いリーダーが要らないで済む集団である場合には、参加についての過度なプレッシャーや地位、役割上の葛藤を抱かずにいられるとも考えられる。

## 7. 今後の課題

今後の研究の課題として、まだ活動をしていない男性を対象にした研究が必要である。今回は実際に子どもとかかわる地域活動をしている男性を対象にしたため、比較的男性性規範にとらわれない男性が多かったと思われる。そのため活動に参加していない男性や途中で活動をやめた男性を対象にした研究が求められる。実際、調査対象グループにも活動が続かずに辞めた男性がいたという話もあり、そうした男性に、いかにアプローチしていくかも課題である。

さらに本稿は都市部で、女性に比べ男性の参加が少ない活動分野を対象としたため、地方での活動や男性の参加が多い活動分野と比較検討していく必要がある。また今回は世代の異なる男性を幅広く対象にしたのが、世代や年齢、ライフステージごとの分析は十分しきれなかった点も課題である。

男性自身の変化について、活動に参加している男性自身に自覚化されていない変化があるのか、あるいは意識の変化が行動に結びついているのかなど、ともに活動する女性や行政等のほかの立場からの視点も把握し、男性の地域活動参加をさらに多角的にとらえることもこれからの研究課題である。こうした課題を踏まえて今後、組織内における相互の人間関係のダイナミズムや組織のダイナミズムについても論考したい。

## 注

本調査で対象となる3団体の活動内容、担い手、ジェンダー特性についてそれぞれ以下の表2～4にまとめた。

表2 T市N学習館「フリースペース・N」の活動概要

活動内容
「フリースペース・N」は学習館の調理室を利用して、土曜日の午後を子どもたちのフリースペースの時間とする居場所事業である。小学生から高校生までの子どもたちが利用しており、自由に過ごす空間になっている。活動にあたって原則2人以上の大人がその場にいるということになっている。調理室という場所を利用して、女性のスタッフが活動に参加しているときは、食材を持ち寄って手料理をふるまうことがしばしばある。子どもたちも楽しみにしており、しばしばリクエストすることもある。フリースペース実施の背景として、2009年にN学習館運営協議会委員主催によって講演会が開かれた。警察生活安全課職員、保護司、団地自治会長を招き、地域の子どもたちを取り巻く環境、現実についてパネルディスカッション形式で実施された。続いて中高生を対象に「自分で作る簡単ランチ」講座が開かれ、3回の講座に19名の参加があった。これらに加えて、近隣の小学校の元校長の支援もあり、実際に居場所づくりを実施するに至った。
担い手
N学習館運営協議会のメンバー（40代～70代）の有志、元小学校校長（60代、女性）
ジェンダー特性
N学習館運営協議会のメンバーに男女の偏りはない。フリースペースの場面でいうと、これまで男性3人、女性5人がかかわっている。しかし女性と男性で活動に参加する頻度は異なる。女性の参加はほぼ毎回みられ、女性2人で活動を行うということはたびたび見られたが、男性2人というときは今まで一度もない。フリースペースに来る子どもたちの多くは女子で、男子が一人も来ない時もある。かかわり方に関して女性が子どもたちに手料理をふるまうことがあるなかで、男性が積極的に子どものために何かをするということはありません。

表3 K市青少年リーダー養成講座の活動概要

活動内容
「青少年リーダー養成講座」は、ジュニアリーダー養成講座（小学校5～6年生）とシニアリーダー養成講座（中学生～高校生）からなり、学校や年齢も違う仲間と楽しみながら、年間10数回の講座を通してレクリエーションやアウトドアの知識や技術を学んでいる。
担い手
養成講座を支える担い手は、指導者と準指導者といわれる人たちである。指導者とは、K市の定める青少年委員のうちの数名によって担われている。青少年委員とは、青少年の健やかな成長を願い、青少年の活動団体を外側から見守っている委員で、教育委員会から委嘱を受けている人たちである。青少年委員活動の一環に、養成講座がある。指導者はジュニア担当とシニア担当があるものの、互いに協力し合うなど担当を越えたかかわりもみられる。準指導者とは、シニアリーダー養成講座を修了した、18歳から30歳くらいまでの青年を中心に構成され、養成講座において、レクリエーションやキャンプの指導の一部を担っている存在である。指導者といっても、指導するための技能を身に付けた人が選ばれているわけではなく、講座の前に指導者・準指導者で話し合いや試作が行われ、指導できるようにする。子どもたちを指導するだけでなく見守り、手助けしながらいっしょに活動している。準指導者は、指導者の意向をくみ取り、子どもたちのグループに入ってわかりやすく伝え、より身近な存在として子どもたちと一緒に活動している。準指導者は、講座を修了してきた者が中心なので、子どもたちと大人（指導者）の間をつなぐ存在であるといえる。
ジェンダー特性
養成講座に参加する子どもは、女子の方が多く、特に中高生になると男子の参加が少なくなっている。中高年の担い手である指導者に男女の偏りはない。青年の担い手である準指導者は、登録している数に男女の偏りはあまりないものの、実際に活動に参加しているのは女性の方が多いようである。



表4 S地域おやこ劇場の活動概要

活動内容
S地域おやこ劇場は、地域でより良い子育て環境を作っていこうということを目的に、いくつかのブロックを作って子どものための自主活動を行っている、地域住民による団体である。参加する会員が資金と力を出し合って運営されている。年に4、5回子どもと劇を鑑賞することが中心で、観賞会に向けての準備をしたり、見終わった後に子どもたちに感想を聞いたり、子どもの様子を話し合ったりする。そのほかに、ブロックの垣根を超えたお祭りや子どもと青年によるキャンプなどの体験活動も行っている。
担い手
子どもをもつ親と未婚の社会人と学生である。未婚の社会人と学生は青年という形になっている。
ジェンダー特性
S地域の中でもさらにいくつかのブロックに分化しており、全体を把握することはできないが、インタビューをした男性のブロックは、女性が多く男性が少ないということだった。ただ活動の中で性別による役割分担があるわけでもなく、男女によって活動に違いがあるということはない。

引用・参考文献

<p>1. 榎本博明『現代のエスプリ別冊 セルフ・アイデンティティ 拡散する男性像』至文堂 2007</p> <p>2. 榎本博明『自己開示の心理学的研究』北大路書房 1997</p> <p>3. 江原由美子『ジェンダー秩序』勁草書房 2001</p> <p>4. イヴ・K. セジウィック著、上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会 2001 (Eve Kosofsky Sedgwick <i>Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire</i>. Columbia University Press, 1985.)</p> <p>5. 伊藤公雄「男の性もまたひとつではない」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『新編日本のフェミニズム12 男性学』岩波書店 1995</p> <p>6. 伊藤公雄『ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会 2008</p> <p>7. 伊藤公雄『男性学入門』作品社 1996</p> <p>8. 伊藤裕子『ジェンダーの発達心理学』ミネルヴァ書房 2000</p> <p>9. 飯島絵理「『男性の地域への参画の促進』の問題点と今後の課題」『NVEC実践研究 Vol.3』国立女性教育会館 2013</p> <p>10. 柏木恵子・高橋恵子『日本の男性の心理学—もう1つの</p>	<p>ジェンダー問題』有斐閣 2008</p> <p>11. 中村正「男の子は暴力的なのか？」天野正子・木村涼子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社 2009</p> <p>12. 内閣府「政策・方針決定過程への女性の参画状況及び地方公共団体における男女共同参画に関する取組の推進状況についての調査」 2012</p> <p>13. 総務省「平成23年社会生活基本調査」 2011</p> <p>14. 鈴木淳子「ステレオタイプとジェンダー」鈴木淳子・柏木恵子『ジェンダーの心理学—心と行動への新しい視座(心理学の世界 専門編5)』培風館 2006</p> <p>15. 多賀太『男らしさの社会学 揺らぐ男性のライフコース』世界思想社 2006</p> <p>16. 多賀太『男性のジェンダー形成 〈男らしさ〉の揺らぎのなかで』東洋館出版社 2001</p> <p>17. 田中俊之『男性学の新展開』青弓社 2009</p> <p>18. 全国社会福祉協議会「平成22年全国ボランティア活動実態調査」 2010</p>
--	---

付記

本論文は第2執筆者の指導のもとに第1執筆者が東京学芸大学大学院修士論文(平成25年度)として提出したものの一部を加筆・修正したものである。

# 都市部における男性の地域活動参加と男性性

—— 子どもとかかわる地域活動に参加する男性を事例に ——

## Masculinities and Men's Participation in Urban Community Activities:

### A Case Study of Men who Participate in Community Activities for Children

浅 香 宏 紀\*・中 澤 智 恵\*\*

Hiroki ASAKA and Chie NAKAZAWA

生活科学分野

#### Abstract

The purpose of this study is to clarify the role of gender in men's participation in voluntary community activities for children.

Currently, promotion of men's participation in general community activities is an effort toward the realization of a gender-equal society in Japan. However, community activities' characteristic of participating and cooperating with a diverse group of people does not align with the socially formulated idea of masculinity. When men volunteer for these community activities, do they experience a sense of discomfort and conflict?

I interviewed some male participants in community activities geared toward children, and examined any change in their consciousness of the activity, the ways the males interact with other people, and any difficulties experienced by the men throughout the activity.

Results show that few men maintained a strong sense of discomfort and gender conflict, as a result of the following four factors: (1) transformation of the men's consciousness and attitude, (2) conflict avoidance by maintaining their traditional gender role, (3) connection with a variety of others throughout the activity, and (4) the non-hierarchical flat structure of the volunteer groups.

**Keywords:** community activity, masculinities, gender

*Department of Human Life Studies, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本研究の目的は男性の地域活動参加において、ジェンダーがどのように関係しているのかを明らかにすることである。

今日の日本では、男女共同参画社会の実現に向けて、男性の地域活動参加の促進が課題である。しかし地域活動では、世代や性別の異なる様々な他者と共同的にかかわることがしばしばある。その場面は競争心があることや自己主張的などといった男性性の規範とは相いれない関係性により成り立っている側面がある。そのよ

---

\* Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

\*\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

うな地域活動を男性が行うとき、男性自身は違和感や葛藤を経験するのだろうか。子どもとかかわる地域活動に参加している男性を対象にインタビューを行い、実際に男性にとって困難があるのか、また活動していく中で他者とのかかわり方や活動に対する意識に変化があるのかなどを検討した。

その結果、ジェンダーの違和感や葛藤を強く抱いている男性はあまりいなかった。その要因として、(1) 男性の意識や態度の変容、(2) 性別役割分担意識による葛藤回避、(3) 活動を通じた多様な他者とのつながり、(4) フラットな活動組織の構造の4点が関係していると考ええる。

キーワード: 地域活動, 男性性, ジェンダー